
暁を求めて

うなぎパイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁を求めて

【Nコード】

N1156U

【作者名】

うなぎパイ

【あらすじ】

暁の護衛から、海斗が恋姫の世界に来た。だが、来たのは海斗一人だけではなかった！？これは海斗がハーレムになるお話です。設定が途中で変になるかも知れませんが、初心者ということで許して下さい。

エピローグ：舞の心境（前書き）

全て丸写しですね。

すみません

エピローグ：舞の心境

「その殆どはお前の敵なんだな……」

「そう、誰も信じられない…信じられるのは自分だけ……。お前は敵、だから、殺さなきゃ……」

「そうかもな……。それを決めるのはお前だ。…でもな、一つだけ確かなことがある」

「俺は死なない。誰にも殺させやしない……」

「なに言ってるのよ、瀕死の分際で……」

「生きてんだろが…目の前で、ああ？…オレの心臓の音…聞こえんだろうが……」

「だから、何だったのよ……あとほんの一刺しすれば、あんたは死ぬのよ……」

「手え、見てみる」

「え……」

「お前の手は、その一刺しをしようとしているのか？……まあ、なんでもいいや……」

「オレは」

「オレはお前みたいなのヤツ、嫌いじゃねえぜ……」

ぐうんと沈む意識。

急激に閉じていく視界。

オレは人生で三度目……自らの死を覚悟した……

そして……途絶えた。

……

エピソード：舞の心境（後書き）

まだ、恋姫の世界には行きません

エピソード：海斗と舞（前書き）

すみません。短いです。はい……。内容は、今回からほぼ変わります。まあ、前は丸写しだったけど……気に入らなかつたらすみません。

エピソード：海斗と舞

（舞 side）

あの日から数日がたち、禁止区域退去法案の前日になった。
あれからアイツ（海斗）は、有り得ない程の回復力で体力が全開の
2/1以上にまでなった。

一応、幹部という事で工作作業の最終確認をしに行っている。
私も幹部だけど、行かない。行く気になれない。

アイツ（海斗）は、他の奴らとは違う

この数日間、その事ばかり考えている。

私は、これまで自分以外の者は敵だと考えていた。いや、現在でも、
その考えは変わらない。

でもアイツは…アイツだけは違う。

自分の本能が、そう告げる。

説明しろと言われても、説明出来る自信が無い。
なんなのよ……この気持ち悪い感じわ……

「おい、舞。」

アイツが話しかけてくる。まったく…人の気も知らないで……。

「何よ」

「ちよと付き合ってくれ」

「はあ？何でアタシがアンタに付き合わないといけない訳？」

コイツの近くに居ると胸の所がムカムカする。早く離れたい。

「いやいやいや、こいつぁお前にもメリットがある話だ。」

予想外の返答に反応してしまう。

「内容は?.....」

その言葉を聞いて海斗はハツと鼻で笑う様に言って.....

「亮を...いや、アキラを殺す」

そう言い放った.....

エピソード：海斗と舞（後書き）

感想等あったらお願いします

エピソード：進展（前書き）

遅れて申し訳ございません！！
リアルで、忙しすぎる！！
胃薬が手離せない！！！！

エピソード：進展

（海斗 side）

「亮を…いや、アキラを殺す」

そう言い放った。

舞は少し目を見開いて呆然としている様子だった。

まあそうだろうな。いきなり、こんな事言われたら。

「アンタ本気？」

「当たり前だろ？嘘が大嫌いじゃ生まれてこのかた十数年、一度も嘘をついた事の無い純情青年、朝霧海斗だぞ俺は。」

「何が純情青年よ…」

「まあ、そんな事は良いから、どうする？手伝ってくれるか？」

「何でアタシなの…」

「そりゃあ、お前…この前「アイツを殺すなら手伝う」みてえな事言ってたじゃねえか」

まあ冗談半分だっただろうがな。

俺の言葉を聞いて考える様な顔をして…

「まあ良いわよ」

「ありがたいねえ」

「で？今から殺しに行く？」

先程の不機嫌そうな顔から180回転して笑みを浮かべている。

顔は良いんだか理由が、理由がなあ……。

「まあそう慌てるなって」

「何よ、行かないわけ？」

「お前なあ最後まで人の話聞こうとしろよ……。アイツを殺すのは退去法案の当日……つまり明日だ」

「……何でわざわざ引き延ばすの？当日なんて明日じゃない。今殺しても数時間の差よ？」

「話最後まで聞けって言ってるんだろ？理由があんだよ」
「理由？」

「アイツは一応は幹部だ。部下は金剛と不動だけじゃない。数十人は居るだろう。もし今日、俺達がアキラを殺したら、金剛と不動を筆頭に部下が俺達二人に襲ってくるだろう」

「そんなの返り討ちにして皆殺しにすれば良いじゃない？」

「確かに、それは不可能じゃない……でも、問題はそこじゃあねえんだよ。さっきも言っただろ？アイツは一応は幹部だ。組織つつうのは、上の人間が一人でもいなくなれば少なからず混乱する。極めつけに、ソイツの部下達が敵討ちときたら更に混乱し崩壊する。」

「別に良いじゃない。私はこの組織が崩壊しようが、しまいがどうでも良い。」

「まあ、俺もそれには同意なんだが……」

「何よ、何かあるの？」

「……結論から言おう。俺は、ここを抜ける。」

「……そう……」

俺の言葉を聞いた瞬間、舞が暗い顔をしたように思えた。

「俺は杏子と麗華を連れて行く。」
「……………」

「お前は、どうする?」

「えっ?…」

舞は驚いた顔を見せる。

「お前は、どうするかったつてんだよ。」

「…私は……………」

「こんな所で死ぬのか?」

「私は死なない!」

言うと思った……………」

「なら、俺に付いて来い。」

「……………何でアンタがわざわざ私にそんな事すんのよ……………」

「別に……………何となくだ。」

「何となくって……………」

「お前はそんな事気にしなくて良い。お前は俺を利用すれば良い。」

「利用?……………」

「そうだ…お前は俺を利用すれば生存率は上がるし、これからもっと強いヤツに会えるかもしれない…メリットばかりじゃねえか。」

「…でも、アンタにメリットは……………」

「言っただろ?何となくだって……………詳しくは明日話すわ、じゃあ明

日はよろし
」

そう言いながらこの場から退散しようとしたら……

「待ちなさい。」

そう言い舞が俺の裾を引っ張ってきた。

「あ？」

「……………」

「なんだよ」

「動くな」

「は？」

「良いから、絶対に動くな」

「お前が殺してきたりしない限りな」

「しない」

「なら良いぜ」

「……………」

無言のまま舞は顔を俺に近づけ俺の唇にそつと唇を重ねてきた……

「何となくよ……………」

「なんだそりゃ」

「私に関わるうとするバカ、アンタが初めて」

「お前が強くて、いい女だからな。性格は多少面倒だが、それもまた面白い」

「……………」

「静かなキスだな」

「うるさくする必要はまったくない」

「確かに」

「こうしたところで、何かが変わるわけじゃない」

「だが、何も変わらないとは限らないぜ」

「……………」

「それか、間違いなく変わることに、教えてやるつか？」

「抱きたい？私を」

「抱かせてもらえるならな」

「命懸けになるわよ」

「命を賭けることにはなれてる」

「そうみたいね…だったら、アンタの強さ、見てあげる」

そうして、俺の決戦前夜は過ぎていった。

……………

……………

…

エピソード：進展（後書き）

キャラこれから多く出していくので暁の護衛 罪深き終末論をやっていない方は分かり難いと思いますが、宜しく願います。

ご感想等があったら願います

エピソード：杏子の機嫌（前書き）

部活がめんどい……

胃が痛い

もう年寄りみたい

エピソード：杏子の機嫌

（海斗side）

舞は俺の隣で寝ている。いつものしかめっ面と違い気持ちよさそうに…

そんな事を考えながら、俺はゆっくりと音をなるべくたてずにベットから抜け出した。

そして、そこら辺に投げ捨てていた服やズボンを拾っていき、着替えていく。

着替え終わり、出口に向かいドアノブ手を掛けたら

「何処行くのよ」

後ろから声が聞こえた。

振り向くと、そこにはベットの上で上半身だけを立てて丸見えの胸を隠そうともせずにいる舞がいた。

「いや、別に大した事じゃない。ただ五十嵐に会いに行くだけだ。」

素っ気なさそうに言う。

「組織の一番上に会いに行くことって十分に大した事よ。」

呆れたよな声を出しながらベットから出て先程の俺の様に、服を拾い集める舞……全裸で…

「お前なあ…少しは恥じらいつてもんを持ってよ…」

「何今更そんな事言ってるのよ。さっきまで思いつきり見ていたんだから良いじゃない。」

まあ俺もここで恥ずかしがる様な初じゃねえからなあ、と思いつながら海斗は（勝手に）付いて来るであろう舞をドアの前で溜め息をつきながら待つ。

舞が着替え終わり俺達は部屋を出た。

そして俺は五十嵐の部屋の逆方向に行く。

それを見た舞は

「アンタ何処行ってんのよ。アイツの部屋と、そっち側は逆方向よ。やりすぎで頭でも可笑しくなったの？」

「お前は本当に一言余計だな。…まだ寄る所があんだよ。」

そう言いながら少し歩く。そして俺は、ある部屋の前で立ち止まる。舞も一度立ち止まる。

舞は目の前の部屋を見てある事に気が付く。

「ここは確か……アンタの部屋？」

「よく知ってんな？」

「一応、『幹部と幹部は面識があった方が良い』って言われてるから幹部は他の幹部の部屋の事知ってんのよ。」

まあ私は他の奴なんて興味なかったから、うる覚えだけどね」

「うる覚えだけど俺の部屋の事を覚えていた……ねえ」

「……なんかムカつくわね…言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ。」

「べつに〜」

そう舞と下らない話をしながらドアノブに手をかける。

まだ後ろでは舞が何か小言を俺に言っている。

「だから

ドアノブを回す。

言ってるんだろ？」

そこで可笑しい事に気付く。普段よりドアノブが軽く感じる。

他意は

理由は簡単

ないって

内側からも開けようとしているのだ。しかも、俺の部屋に居るのは一人だけ……

目の前に、その女性は居た…

いい加減

杏子

しん…じ…て…」

女性 杏子 を目の前にして固まる俺。

特に彼女は何も言わないし、行動もしない…

ただ、ジト目で見てくるだけだ…そう、ジト目で…

流石にずっと固まっただけだと思えばいいけど、俺は行動を起こした。

「よう、あん」さっきまでは、お楽しみだったねえ」…ず」

Oh…

「聞こえない、とも思ってたのか？確かに他の所に比べて機能性は素晴らしいだろうけど、所詮は禁止区域…“防音”なんて機能はボロなって無くなってるようなもんさ。」

ヤバい、杏子の機嫌がヤバい！

何か杏子の後ろに黒いオーラみたいなのが見える！？

俺は前まではこんな普通に受け流していたのにつ！俺も丸くなっ
たって事かっ！？

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

……… ってオイイイイ!!

後ろからも嫌な視線感じんぞ!

舞だろ!? ゼツテエ舞だろ!?

事の責任の半分お前んのだからな!?

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

俺の顎先から汗が垂れる。

「はああ……………」

沈黙を破ったのは……………」

「まあアンタが他の女に手を出すなんて今更って感じだけだな。その様子だと、す・こ・し・は・反省しているらしいし？前よりはマシさ」

杏子だった

「そっそうだろ？俺も少しは成長したんだよ」

「開き直ってるし……で、何？まさか、舞とやった事でもわざわざ報告しに来たの？」

「一々俺に突き刺さる様な事ばかり言いやがって……どんな教育受けたんだか……」

「禁止区域、もと言いアンタの教育だよ」

「はっそら最悪だ」

何とか普通の雰囲気持って行けた……明日（いや正確には今日か）が殺し合いになるなんて思えない……

「何時まで私は空気になってれば良いわけ？」

「つつ!?!」

「何驚いてんのよ、連れて来たのアンタでしょ……」

正確には俺連れて来てねえし……

「まあ外ではなんだから中で話そうや」

「まあ良いけど……」

そうやって俺達は部屋に入って行った……

……

……

……

エピソード：杏子の機嫌（後書き）

暁の護衛についてはプレイしいて頂くかWikiでも見てください

誤字、脱字、感想があったら教えてください

エピソード：作戦（前書き）

台風やベーツ！

短えっす！

エピソード：作戦

ドスッ

その音をたてながら無雑作にベットへ腰を降ろす海斗。

舞はベットの横に置いてあった椅子に座り足を組み、杏子は何処に座るか考えたが無いと結果づいた様子で壁に寄り掛かり胸を掬い上げる様に腕を組む。

各々が好きな位置に着く

「今から作戦を話す……まあ作戦つつう程大したもんじゃあねえけどな」

「そんな御託は良いからさっさと言いなさいよ」

舞はそう言い俺を急かそうとする

「お前マジで自分勝手な奴だな…コミュニケーション能力をもう少し育め」

「黙れ」

ドスッ

「痛ッ!?!」

コイツ蹴ってきやがった!?!?
どんだけ短気なんだよ!?!?

「お前イキナリ蹴んなよ!?!」

「早く言えッつってんでしょ」

ドスッ

またも蹴られる俺

「痛ッ!」

「アンタM?」

「違エーよ!?!?」

ドスッ

またまた蹴られる俺

「今の俺！？今の俺がワリイの！？」

ドスッ

「分かったよ！！言えば良いだろ！？言えば！？」

ドスッ

「ええ！？普通の疑問さえ言っちゃイケネエの！？」

ドスッ

「だから痛いって！！杏子もなんか言ってくれよ！？」

いきなり名前を呼ばれて驚いたのか、杏子は目を見開いてこちらを
向く

そした杏子は1・2秒経ってため息をつく

「…舞」

「……………ッチ…」

そう舌打ちし、上げていた足を降ろし再度足を組む
杏子に言われてこの不毛な戦いは終わった

—————

「じゃあ気を取り直して…俺たちは、まず五十嵐の所に相談し、その後アキラの所に行き麗華を連れ出す」

「アキラって……………」

「ああアイツだよ。餓鬼ん頃は友達だのなんだの、訳分からん関係だったが今は敵だ。殺すだろうが同情みたいなくだらないことすんなよ？」

「…分かってる」

「なら良いが……………話は戻るが麗華を連れ出した後、俺、舞、杏子、麗華、この4人で一般区、高等区の順に人質を連れて脱出する。…
…大体こんなんだが…どうだ？」

「私は別に良いわ」

「私も」

舞、杏子の順で了解を得た

「んじゃま、まずは五十嵐ん所にも行きますか」

エピソード：作戦（後書き）

相馬、出した方が良いツスカね？

感想、意見等待着ってます

エピソード：強者共（前書き）

今回は自分なりに頑張りました

書き方を変えてみたんですが……

エピローグ：強者共

蛍光灯の光が途切れ途切れに光続けていた

比佐深駅内部の廊下だ

パチカチと蛍光灯により発せられる音が、薄暗い廊下に響く。
その情景内を3人の人間が悠々と歩き続ける

「長えー」

情景による薄暗い雰囲気似合わないふざけが入った様な声を発しながら、背筋を曲げズボンのポケットに手をつ込んで先頭を歩く男、朝霧海斗がいた

「ブツブツ五月蠅いやツねえ、また蹴りでもぶち込んで欲しいの？」

海斗の姿を見てため息をつきながらそうセリフを吐く海斗の少し斜め後ろを歩く女性、舞

「ふざけんな、俺はMじゃねーんだよ」

「あら残念」

海斗の返答に意地悪そうに舞は微笑む

「くだらない事やってないで急いだ方が良いんじゃないにか？
時間、そんなに無いんだろ？」

少し機嫌が悪そうに2人の話を中断させようとするもう一人の女性、杏子

「ん？ああ悪いな、じゃちよっくら急ぎますか」

そう言い背筋を伸ばし、先程より一歩一歩が大きく彼は歩き出す
そんな彼の背中を『まったく』とも言いたげな顔でため息をつきな
から見続ける杏子

そんな彼女をジィーと見続ける舞

その彼女の視線に気づき杏子は

「……………何？」

舞にも機嫌が悪い様に聞く

彼女の機嫌など気にも留めず舞は

「……………嫉妬なんて醜いだけよ？」

「ッなっ！？」

舞は勝ち誇った様な顔で「はん」と鼻で笑い杏子は、舞の答えに顔を赤く染め身じろぐ。

「ッ！どっどっういっことだよそれ！？」

「別に、そのままの意味よ」

杏子の気迫迫る勢いに彼女は、その微笑みを絶やさな

「オーイ、急ぐんじゃねーのか？」

自分達の前から海斗の声がした。

その声に反応し彼女たちは声がした方を見ると10m程先に彼がいた
言い争ってる間に待たせてしまったようだ

「あっゴメン、今行く」

「……………」

杏子は謝り小走りで彼の元へ急ぐ

そんな彼女とは対照的に舞は命令の指図されたのが嫌だったのだろ
うか、不機嫌顔でしぶしぶ彼の元に歩いて行く。

海斗は2人共、自分の周りに来たのを確認し歩き出す。

「お前が急げつつつたんだろ？」

そう彼は歩きながら顔を杏子の方に向け呆れ顔で言う
その言葉を聞き、彼女は恥ずかしさを覚えたのか急激に顔を真っ赤
に染る

「うつうつるっさいな！ゴメンって言うてるだろ！？」

「おっ……………」

「ぶんっ！ー！」

彼女はそう言いそっぽを向いた

その怒り様を見た海斗は舞の小さく小突き小声で話し始める

「オイ、舞テーマまたくだらない事やったたる？
アイツの機嫌直すの面倒くせえんだぞ？」

「知らないわよ」

「嘘つけ。口元、緩んでんぞ」

「知らないつつつてんでしょ。」

あの女の機嫌なんて、アンタと一発やりや直んでしょ？」

「おまえなあ……」

海斗は手で頭を押さえ始めた

それから2分といったところで一つの地下へと繋がるであろう階段

があつた

そこを彼ら三人は降りて行く
中はとても暗い。光の元となる電気類は数が少なく点滅を起こして
いる

これから行く所はこんな“禁止区域”らしくない。あそこ以外には
あまり気を使わないのか？

そんな疑問を抱いていると彼らの前にある一部屋に突き当たった。
扉は硬く閉ざされている。
目的地だ。

だが、彼はあることに気づく。

(いつもの門番がない？)

いつも彼をウザツたしい程に彼を入出拒否してきた門番が居ない

(……………まあ、いいか)

考えていた事はあまり意味がないと決め付け、いきなりドアノブに
手を掛けて無造作にドアを開ける。

そこには2人の男性と1人の少女が居た。

そつま ただお
相馬忠雄

元特殊部隊であり、この組織の頭脳担当

細身でありその体には余分なものが一切無いととれ、顔には数個の
傷跡が見える

見ただけで一般人はその威圧で恐れを抱くだろう

そのすぐ隣で一本の刀を大事そうに抱えている少女

そつま かえで
相馬楓

相馬の娘であり、父親譲りの身体能力と母親譲りであろう彼女の刀

による接近戦の強さ。
それにより、彼女は身なりで組織の幹部になっている

中央にある机の椅子に威風堂々と腰を降ろして座っているのがこの比佐深駅を統べる男、五十嵐いがらし行雄ゆきお

元特殊部隊であり元政治家でもある男

体格は2mはあるであろうか巨漢。体付きは良く、服装の上からでも分かる様な筋肉質。

だが、肉体での近接戦闘では海斗、忠雄には勝てない。

だが、彼の恐れる力ものは元特殊部隊によるものでなく元政治家による交渉術、人間としての器。

海斗、忠雄、舞らが近接戦闘のスペシャリストなら、五十嵐は交渉のスペシャリスト

この2つの能力があるからこそ、この比佐深駅を統べる事が出来ているのだろう。

「おい海斗、少しはノックするだの礼儀を慎め」

相馬は半ば呆れ気味で注意をしてくる

「悪いな、礼儀知らずで。つうか礼儀をぶち壊すように教育されたし。

別に良いだろ？ここでオナニーだのレイプだの、してる訳じゃねえんだし？」

「…はああ、お前は……」

そう言っつて頭を手で押さえる相馬

本来組織であるならば上司、しかもトップにこんな口を利いたらた

だでは済まない
特殊部隊に所属していたからこそ、この意味は世間一般より重く感じるであろう。

「別に構わん」

「……………分かりました」

もう諦めたのか相馬は五十嵐に言われて引き下がる

「で、海斗、何の用だ？まさかこのおフザケの為に来た訳ではあるまい」

話を切り替える為に五十嵐の方からふってきた
こちらからとしたら大助かりな話だ

「ああ……………これからの予定の話だ」

「……………」

此方が何を言うのか分かっていたのだろうか、五十嵐は沈黙を続ける。

「率直に言う……………俺は此処から抜け出す。俺を含め後数人もな」

「……………」

「その為にアンタにやって欲しい事がある」

「……………何だ」

俺の言葉に五十嵐が重い口を開く

「俺達が逃走中、追撃するのを止めるとこの組織の連中に言って欲しい」

「ほう………何故だ」

「俺や舞、杏子とかの数人ならそこら辺の奴等なら簡単に捻り潰せるし、アッチからも攻撃はしてこないだろう。だが今回は時間との勝負、そんな事に対処していたら敵さんにやられてゲームオーバーだ」

「それは構わん。だが逃げ道はどうする、敵がホイホイと道を作る訳ではあるまい」

「地図を見せてくれ」

「相馬」

「はっ」

そう言い相馬は手に纏めて丸めてあった地図を五十嵐の机の上に広げて出す

海斗はある場所を指す

「ここ、昔の工事中に使われていたエレベータの様な物がある」

「だが海斗、そのエレベーターは古い為壊れて使えなくなっているはずだ。だから政府の者も使わない」

「いや、この前俺が下見に行ったとき数回はギリで動く」

「海斗何時そんな事してたんだよ」

先程まで話に入っていなかった杏子が俺に疑問を問い掛けてきた

「秘密」

「何でだよ」

「少しミステリアスなのがいい男の秘訣だ」

「何言ってるんだか……」

杏子は呆れながら諦めた様に引き下がった

俺は杏子へと向けていた顔を五十嵐へと向ける

「まあ、大体こんな感じだな」

「……海斗、今の政府をどう思う」

「ああ？」

いきなりの言葉に驚く海斗

「世の中に平等平等と言いながらその実、それを実行出来ていないと
思うか？」

「……いや」

「そう、まったく出来ていない。奴等は自分の都合が良い時だけ市民平等だのなんだのを使い、都合が悪ければ自分の権力をちらつかせる。誰がそんな者を信じ、敬う？国民の中で真に信じ、敬っている者などほんの一握りだ」

「政府の奴等だってそれくらい分かってんだろ？」

「確かにそれをあいつ等は分かっている。分かっているから最終的にその国民などの反感などを金や権力で終わらせている。そして互いの溝は深まり、禁止区域（このちいさいな）区域退去法案が起きたのだ。

この禁止区域には犯罪者は居るがそれ以外にそういう政府の横暴によりここに来る以外になかった者もいる。

だが奴等はそれを悔やむどころか、自分達のミスや失敗を全て私達に押し付けそれを無くす為、政府を正義、禁止区域（わたしたち）を悪、そう割り切り悪抹消（わたしたち）しようとしている。

国民達は私達が抹消されて喜び安堵するだろう。

だが国民達は知るであろう、それが一時のものに過ぎないという事を。

政府の者達は部屋の隅に溜まった埃を掃除したに過ぎない。埃は溜まり続ける。

根源たる物を直さない限りはな」

「……………」

海斗はこの話を黙って聞くしかなかった。

内容が分かっているのだの首を突っ込み難いなど、そういう事では

無い

五十嵐が話している途中、本能的に言葉を発してはいけなさと感じた海斗は思う

これが五十嵐行雄という名の器なのだ、と

「海斗、おまえには本当に感謝している」

「ん？」

「素直に感じている。個人の力というものを」

「特に何もしてねえよ」

「いや……この幻とも言える一週間は紛れも無くお前が作り出したものだろう……よくやってくれた」

そう言い五十嵐は目をつぶり微笑しながらさらに腰を深く椅子に座った

海斗も釣られた様に微笑む

「男に褒められても嬉しくねーよ」

「クツクツク……そうだな……組織への声掛けは了解した。それと……」

「ん？」

「舞を頼む」

出口に腕を組み寄り掛かっていた舞が少しだが反応した

五十嵐はそれを一弁し続きを言う

「俺は舞を愛せなかった。しかし、俺の娘に違いは無い。お前ならば、導けるだろう」

「あそこに本人いんぞ」

「構わん、これが最後だろうからな……」

その瞬間、舞の顔に影が差し込んだ様に感じた

「私との話はこれで終わりだ」

そう言い終えると五十嵐はまるで眠るかの様に目をつぶり黙った
すると、隣にいた相馬が少し前に出て話を掛けてきた

「次は私か……」

「まあそうだろうな」

「海斗、頼みがある」

「……何だ?……」

「楓を……この子を頼む」

「……お前はどつする?……」

「俺は此処に残り、死ぬまで戦う」

「無理だ、そいつはお前と死ぬ女だ」

「ならばどうしろと言つのだ……仲間の死を無駄にし、此処を放棄する真似は出来ん」

「ここで終わりだと思つてんのか？」

「なんだと……」

「楓を連れて行ってやる」

「海斗、お前……お前なら託せる」

「お前、何勘違いしてやがる」

「あんたも連れて出る、ここをな」

「俺も杏子も、それから楓も世の中を知らない……外の世界を見て回るってのはどうだ……」

「……………」

「あんたが道案内人だ」

「俺は……」

「アンタも来い」

「…………お前は、俺や五十嵐さんの想像を超えるのかも知れないな、どうしてもこう、引き寄せられる。悪魔に魅入られた様な感覚だ」

「あんまり良い例えじゃないな」

「容量が計り知れない。だが、それ故に不安でもある」

「楓はどうだ」

海斗のいきなりの問いに驚いたのかいつも半開きの目が大きく開く

「私は構わない」

「……楓、海斗の事をどう思う」

「え？」

相馬からの問いに先程より驚いた風に見えた

「……………」

楓は真剣な顔で悩み始めた
その数秒後

「……………も良いと思いました」

「ん？すまん、もう一度言ってくれ」

「貞操を捧げても良いと思いました……………」

その言葉に静まる周り

「……………そうか……………そう、か……………楓が選んだのならば、俺がどう
こう言う領域ではない」

その後もブツブツ何か言っている相馬
海斗が何かきままずいなあ〜と思っていると目の前に何かか迫ってくる
そう……………相馬の拳……………が

「つつ!!あぶねっ!!!!!!」

「テメエ、楓に何をした!?事と次第では殺す!!」

「おーおー……………随分な迫力じゃねえか」

「分かってんのか!?ああっ!!?」

「だったら見張ってる」

「……………何?」

「俺がアイツにこれから何をするのか、何をしてきたのかを、親と
して」

「……………」

「アンタは生かす。絶対にな」

「最初から俺に、そう言わせる為に……?」

「まあな」

「そうか……楓には手を出さないんだな」

「……………」

「貴様!!」

「永遠にループするから勘弁してくれ」

「五十嵐さん、私は……」

「別に構わん、それに次の舞台に大きな力が残っていた方が良かる
う」

「はっ」

相馬が引き下がる

海斗は伸びをして、上げた手を下ろし五十嵐に向く

「これで最後のお別れってやつだな」

「そうだな……」

未だに五十嵐は目を瞑り続ける

「俺は、アンタの残した道を辿って生きる」

「そうか」

「………今日で八月も終わりか」

「………未来は変わらないだろう」

五十嵐が語り始める

これを聞くと本当に別れが近づいていると感じる

「しかし、過程に変化をもたらすことには成功した」

「それで満足なの？」

杏子は五十嵐にそう問い掛ける

「結局退去させられて、多くの人間は施設に入れられるのに」

「まだ終わりではない」

それはまるで問いを否定する様に

「お前達、終わるつもりはないのであるう？」

「まあな」

「……さあもう行け、時間はそこまで無い」

「ああ」

五十嵐の切り出しから、全員出て行く

最初は出口に寄り掛かっけていて舞から

出て行く時に少し五十嵐を見た

五十嵐はそれに気づくと少し下を見て微笑する

杏子は焦った様に頭を下げ「しつ失礼しました！」と言い出て行く

楓は杏子と打って変わって静かな物言いで「……失礼しました」と言い出て行く

相馬は何か言いたげだったが「失礼しました」それ以外は何も言わず出て行く

俺は出口に向かい歩き、目の前になったら顔だけ少し後ろに向け「じゃあな」と言い、五十嵐は「ああ」とだけ言い微笑する

そして俺はゆっくりとドアを閉めていく

見えるのはただ一人の男

その男は例え一人になろうと足掻き戦い続ける

どれだけの差があろうと

どれだけの犠牲が伴おうと

どれだけの傷を負おうと

威風堂々たるその姿、まさしく王と言えるであろう

ドアは閉まってい

海斗はその日、一人の王たる者に別れをつげた

エピソード：強者共（後書き）

どうだったでしょうか

なんか最終的に自分では感動系になったと思いました

まあ皆さんが感じなくても馬鹿な作者が感じたただけなんで……

感想等宜しくお願いします

エピソード：変わりゆく人間（前書き）

スイマセン

こんだけ待たせといてこの短そで

エピローグ：変わりゆく人間

海斗達は先程降りてきた階段を上がっていく

ここに街中の様に流れる音楽や車の音などなく、聞こえるのは歩き続ける足音、話し声などだけ。

「海斗、これからどうする」

「あー、まず麗華救出かな」

後ろに居る相馬からの問いに海斗はダルそうな口調で答える

「麗華、察するに人質の中に居る人間か？」

「そつだ、二階堂麗華、高等区の人間だ。
アキラの野郎に連れてこられたらしい。」

「何処に居るのか分かっているのか？」

「まっ、ぼちぼちと」

「海斗、提案なんだが、」

その声に反応する様に海斗は後ろを向き相馬と向き合う

「なんだ」

「これからは激しい戦いになるだろう。」

禁止区域の者なら、ほぼ徒手格闘技による殺し合いになる。

だが、政府により比佐深駅ひさふかに赴いてくる特殊部隊ならば徒手格闘技だけでなく、銃撃戦による殺し合いになるだろう」

「それで、お前の提案は？」

「まあそう急かすな。」

銃対拳、正面から立ち向かえば圧倒的に不利だ。こんなことは子供でも分かる。

ならば同じ場に立てば良い」

「……そこら辺にある様な弱っちいもんじゃ、効かねえだろ？」

そう、こちらには五十嵐のツテしかない。

禁止区域で食料なんて物が手に入る事自体ありえないものだ

それプラス銃なんていう高価なものだ、すぐに限界なんてものは来る
威力が強い物なんてなおさら手に入らない

だが、あちらは違う。あっちのバックは政府、国だ。
個人対国なんて結果は目に見えている

威力の強い銃なんてすぐに手に入る

耐久性の強い装備なんてすぐに手に入る

これが現実と言つもの

「ふつ分かっている。

こちらとて無駄に歳月を重ねて来た訳では無い。

それ相応の武器ものはある。」

「そつ」

海斗は相馬の答えを聞いて納得したのか素っ気無く答えた

「で、結局どうしたいんだ」

「ああ私は少しの間、別行動をとろうと考えている。

私達は倉庫にある武器ものを持ってくる。お前はその麗華と言つ女性を連れ出して来い」

「ちよつと待つて!!！」

先程まで一言も喋っていなかった杏子が相馬の言葉に反応する。

「何だ」

「私達は倉庫に行く事決定なの!？」

「そつだが？」

「私は海斗と一緒にいきたい!!」

相馬は「当然だろ?」と言いたげな顔で杏子の問いに答える
杏子は納得がいかないのか、反論を続ける

「駄目だ」

「何でさ!?!」

「今回は時間との勝負と聞く
ならば、襲い掛かってくる相手をほぼ一撃でのす力、技量が必要だ。
だが、お前の戦闘スタイルはスピード等により敵を錯乱し潰すタイ
プ、
時間が掛かる」

「っでっでも!?!」

まだ納得がいかないのか、相馬に食って掛かる

「ならあたしは?」

声を発したのは舞

それに相馬は驚く。そして冷静になり顎に手をやり考え始める
5秒程経ち顎から手を離す

「……………舞も駄目だ。杏子より数段上だがお前もスピードタイプだ」

「……………ツチ……」

相馬の問いに舞は露骨に嫌な顔をし、舌打ちをする
海斗は以外だと感じる。

彼女なら自分の意見を貫き通すと思っていたのだ
そう海斗が考えていると相馬の下から意外な人物が声を発した

「父上、なら私は？」

「楓？」

「私も…私も海斗の力になりたい」

相馬は再度目を閉じ考え始める

また同じ様に数秒経ち、目を開け楓を見つめる

楓も目を合わせる

そして相馬は声を発した

「……………良いだろう」

「ありがとうございます」

楓はその小さい頭を相馬に下げる

「おいおい、良いのかよ…」

「なに、久々に父親として娘の我侭に振り回されるのも良いと思っ
てな」

「はああつ、…まあ良いや」

海斗は諦めた様にため息を付きながらそうセリフを吐く
すぐそこでは楓を嫉妬感満載の目付きで睨む二人がいる

今の雰囲気はとても殺し合いに行くようなものではない
軍人などには、ふざけるなどと言われるであろう。

だが、彼らにとって軍人達が戦場に向かっていく時の心境など当の
昔に壊れている

これが禁止区域の人間

これが数多の戦場を潜り抜けて来た者

正常な者など弱者

壊れている者こそ強者

「んじゃま、行きますか」

「そうだな」

「…わかった」

「……なんであたしが雑用みたいなの……」

「……海斗と一緒に良かったのに……」

彼らは進む

氷河とも言える道を

その先が残酷であるとしても

エピソード：変わりゆく人間（後書き）

ガオガイガー

D i e s i r a e

良いですねー

エピソード：結末（前書き）

兄貴が怖い

エピローグ：結末

薄暗く瓦礫が所々に飛び散っている、もう使われていないとすぐに分かる様な

路線を二つの人影が走っていた

俺は相馬達と別れた後、楓と一緒に麗華を連れ出すため走り続けていた

「海斗、その女が居る場所は分かっているの？」

「ああ、この前一度お前の親父に連れて行ってもらった」

「そう」

楓はそう相槌を打ち走るのに専念していく

麗華が囚われている場所は俺達が居た所とは結構な距離がある

先程居た場所から移動し路線へ降り少し歩いて路線から上がった場所にある

いま、俺達は先程居た所から移動し路線へ降りてその上を走っているところだ

先程、楓と話してから20秒も経っていない頃だ

暗闇なので見え難いが気配で感じた

目の前に男達が佇んでいた。

此方に殺気を隠そうともせず

「待って貰おうか」

出されている殺気と裏腹に静かな声を出してきた

声を発した男の後ろには何十という数の男が壁を作るかの様に横に並び、

俺達の行く手を阻まんとしている

俺達は阻まれている事と、敵を見定める事もあるので敵であるであろう

男達の6m程離れた所で立ち止まる

「…邪魔なんだが……」

「中里様の命によりここを通す訳にはいかん」

（声のキャッチボールするきねえな、こいつ）

そう考えていると俺のすぐ下から声が出た

下を見てみると楓が俺の裾を引っ張って小声で呼びかけていた

<海斗、この後すぐに真ん中の男に攻撃を仕掛けて>

<別にそれは構わないが、それからどうする>

<その後私が海斗の後ろから前に出て中部を一気に叩いて道を切り開く>

<だが、また後ろから追いかけられるなんて面倒くさいぞ？>

<大丈夫、私がここに残って全員を引き受ける>

<大丈夫か？>

<大丈夫、これでも私強いから>

<……分かった>

普通こんな小さい女の子を数十の男相手に一人にさせるなんて鬼畜以外の

何者でもないが彼女は禁止区域の人間だ

こういう場面は何度も遭遇してきた筈だ

その考えがあるからこそ彼は彼女の考えに賛同したのだ

彼は斜め下から前に変わらず佇んでいる男達に視線を変えて男達を見据える

相手はやっと自分達に視線を変えたと知りやっとか、と考えたため息をついた

だがこれが間違いだった

彼らが行うのは遊びでも喧嘩でも試し試合でもない

殺し合いだ

そこには喧嘩などにある殺してはいけないというルールはない
いくら汚く勝つても、いくら綺麗に負けても勝ちも負けは負
けなのだ

故にどんな不足な事態に陥っても良いように先の先を見て対処して
いかなければならない

が、彼らは少し異なるが正々堂々と面と面を合わせた状態で殺し
やり（あうとしか
考えていなかった。

殺し合いで生き残る強者は力がある者でも技術がある者でもない

如何なる状況にも対応、判断、臨機応変たることが出来る者

力、技術は全く必要無いと言う訳ではない
言うならば最優先となる順だ

スポーツで例えようとしてしよう

バレーボールならば相手からサーブが来たとし、その時必要なのは
力となるスパイク力でも
技術力でもない
レシーブ力だ

どんなサーブが来てもどこに入ればいいのか、セッターはどこにいて、
どこに上げればいいのか

それが即座に出来る対応力
攻撃に持っていくにはそれまでに必要になるものがある

これまで1年間2年間スパイクだけを練習していてもそれを実行させる場面にまで持つていかねば
その全てが水の泡になる

他にも野球、サッカーなどに例えることができる

それなのに彼らは一つの事しか考えていなく、あまつさえ落胆し一
秒にも満たないが
目を瞑ってしまった

敵である者達の人数はたった2人
それに比べて此方は数十人
人数は圧倒的だ

だが、彼らは忘れている

禁止区域での戦闘は人数ではなく質

そんなことも忘れている者が強者である訳が無い
中里 亮なかざと じやうという自分達の上にいる人間に頼りすぎたのだ

海斗は合図など無しに膝を曲げ、足のバネを利用して敵である集団
の先頭に立つ

スキンヘッドの痩せ細い男に顔面へ右ストレートを繰り出す
攻撃は相手の頬に吸い込まれる様に当たった
その際、相手の頬から鈍い音が発せられた
一撃で骨を砕いたのであろう

殴られた男は衝撃で後ろの仲間を巻き込み後ろへ後ずさる

海斗の攻撃は止まらない

仲間のおかげで吹っ飛ばずに済んだ男は先程の一撃が余程効いたのか目が虚ろになり

顔を天井に向けている

海斗は着地地点からそのまま男に突っ込む

その時彼は握っていた拳の力を緩ませ指を折り曲げた状態で相手の無防備な喉へ突き刺す

今度は響くのではなく籠ったように何とも言えぬ気持ち悪い音が出た

海斗の攻撃は一旦終わった

彼の横脇から楓が体を低くし海斗前に出て攻撃を繰り返さんとする彼女の小さい体を更に低めたので、今の彼女の位置は男達の膝の少し上辺りにいる

そのまま後ろに剣先を向けていた母親の形見である刀を左後ろから右へ一閃した

その攻撃で楓の前と左右に居た男達の硬い骨ギリギリまで切り、足の筋肉、血管は真っ二つになった

海斗に視線を集中させていたが、意識外からの攻撃に男達は動揺を隠せないでいた

その動揺をチャンスとし海斗は目の前に居る男達を押しつけ包囲網を脱出した

男達は勿論、海斗を追いかける為に振り返り走ろうとしたがそれは一人の少女に阻まれた

「海斗の邪魔はさせない」

楓にアキラの部下達を任せ、海斗はひたすら走り続けていた

彼の頭の中には何時もの考えがない

どんな状況下でも最悪な結果を考えろ

だが、彼の考えにそんなものはない

この後、アキラを殺し麗華を救出し仲間達と表の世界でやっていく

そんな未来を考えた

そんな幸せを考えた

何時もの彼なら絶対に無い事だ

だが、彼はそんな事を気にも留めず走り続ける

やがて目の前に一つの部屋のドアが見えた

彼は歓喜した

(これでやっとう！)

この高ぶりを抑えようともしせずに彼はドアノブ握る

鍵は閉まっていない

彼はドアを引く

中に入る

予想通り麗華とアキラがいた

だが彼は気づく

『海斗!?!』

『助けて!?!』

想像していた言葉が来ない

変わりに返ってきたのは

あざ笑うような顔をしたアキラ

顔を伏せ床に散った血の上に座りながら壁にもたれ掛かった麗華だ
った

エピソード：結末（後書き）

矛盾があっても無視してください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1156u/>

暁を求めて

2011年12月15日00時51分発行